
報告者名	菊地 暁	被調査者生年	① 1946 (男)
調査者名	菊地 暁	被調査者属性	① 宮内契約講長
補助調査者	なし		

被調査者（主な聞き書きは話者①から）

* 話者② 1919年(女)、話者①の母

話者家について

話者家は、もともと宮内の農家だった。屋号をヤマッコという。屋敷の裏に小山があったからだ。今でも近所では「ヤマッコの〇〇」で通る。田んぼは沖の原にあったが、後に海軍工廠用地として買収された。臨海鉄道が通っているあたりで、この鉄道は自衛隊までつながっていた。買収された後は、人から田を借りて話者①の祖母が米作りをしていたが、話者①が中学生のときに止めてしまった。畑は八幡神社の前にあり、新産業都市の工業団地造成の際に買収された。そこは今回の地震で津波をかぶった。

話者②は大正8年生まれ。今年で94歳。宮内にはもう1軒同じ姓の家があり、そこが本家。話者②の父が分家した初代。話者②の父は、話者②が4歳の頃、東松島市の大高森に雨乞いに行き、そこでドブロクを飲み過ぎて脱水症状で亡くなっただけ。リヤカーに乗せられて戻ってきた。当時は日照りが続くと雨乞いのために村の中を歩いたり、塩竈のイシッパマ(石浜)に行くと雨乞いをすることがあった。話者家は婿養子をとることになり、話者②の義父となった。

話者②が長じて迎えた婿養子が話者①の父である。話者①の父は農家をやりながら高崎にあった役場に勤めていた。土地改良区で測量士をしていた。土地改良区廃止後は市役所へ入った。戦争にも2回召集された。柔道が得意で子供たちに教えたりもしていた。

海軍工廠建設のため、話者家が現在地に移転してきたのは昭和17年5月のこと。話者①の父は出征中だった。ここに建物が出来るまでは、八幡郵便局の近くの親戚のところだった。当時は天童家の屋敷が今よりもずっと広がっていた。この家の前もずっと田んぼが広がっていた。家の敷地も田んぼを埋め立てた場所。最初の家は瓦葺きの平屋。たびたび水害にあった。ここはもともと海だった場所で、5、6メートル掘ると貝殻が出る。

話者①は昭和21年(1946)生まれ。上に姉が1人いる。もともとサラリーマンをしていたが、定年前に希望退職する。山や海に行くのが趣味で春から秋は飛び回っている。冬は電力会社の下請けで塗装のアルバイトしている。天気が悪いと作業ができないので、今日は休みになった。

宮内の暮らし

宮内では、東海林、菅田など同じ名字の家が多かったので屋号が用いられた。ヤマッコのほか、ヒガシッパラ、ニシッパラ、ニシノイ、ナカノイなど、居住地にちなんだ屋号が多かった。

宮内のなかを、仙台の新浜から塩竈に続く一本道が通っていた。中谷地には柴山(雑木林)があった。

春になると、砂浜にハマボウフウを取りに行った。そういう場所は仙台新港ができてなくなってしまった。

狐塚という塚があり、そこにお墓があった。お墓は移転の際にもともと旦那寺だった宝国寺に移した。宮内には不磷寺が旦那寺の家もある。

宮内には神社はない。八幡神社の氏子になっている。話者②は、神社のお祭りに鹿踊りが出ているのを見たこと

がある。屋台なども出て、賑やかな祭りだった。

宮内契約講

話者家はもともと契約講に入っていなかった。ヤマッコという屋号の通り、他の家から少し離れた場所にあったためだ。以前の契約講は戦時中の移転でいったん中断した。現在の契約講は、昭和 21 年に再創設されたもの。20 軒ほどが加入。このあたりに住んでいる宮内出身者を、S さんがとりまとめた。「民主宮内契约会」と書かれた帳面が残っている。

契約講では毎年 3 月に移動総会を行っている。参加者は 20 名ほど。よほどのことがない限り、一軒から 1 人必ず参加する。会費は 8,000 円。県内のどこかに日帰りで行く。総会の幹事は 4 つの班で輪番。2 月に当番の班が集まり、行き先などを決め、準備をする。バスの手配がたいへん。

契約講の収入は葬儀手伝いの御礼など。他は行事ごとに参加費を徴収しており、年会費はない。

講長の仕事は葬儀の際の差配など。ある家が津波で一家全員犠牲になり、その葬儀を契約講で手伝った。前の講長さんが几帳面な方で、いろいろ書き留めてまとめてくれていた。自分も引き続きに滞りがないよう、重要事項をパソコンに入力している。移動総会の一覧も作った。

最近、子供が学校でいじめにあって仙台へ転出し、講を脱退した人、引っ越すわけでもないが、付き合いをめんどくさがって脱退した人もいる。

コバハラ講

契約講では 3 月初めにコバハラ（栃木県鹿沼市の古峯ヶ原古峯神社）参りもする。1 泊 2 日で今年は水戸に立ち寄り予定。抽選で 4 人ずつ行くことになっており、何度も続けて行く人もいる。各家庭から 5,000 円ずつ徴集し、あとは講から補助する。昔は自動車とバスで行ったが、今は全てバス。話者②は、2、3 回、夫が忙しい時期に代わりに行ったことがある。まだ雪の残る時期で、着物に下駄では上れないので、同行の男の人にお参りしてもらった。

コバハラ参りから戻ってくると、御札を各家庭に配る。それとは別に、契約講のためにも 1 枚お札を用意し、総会の際に、御神酒 1 升あげて拜む。このためコバハラ参りの後に移動契約がある。その御札は、担当の班長が 1 年間預かる。

津波とその後

2011 年 3 月 11 日は、妻が足の手術のため、仙台社会保険病院に入院するところだった。午前中に娘と一緒に妻を送り、一度自宅に戻り、娘はまた病院に行った。運送会社に勤める息子は岩手県で工作中、話者②は塩竈のデイサービスセンターに出かけており、家は話者①一人きり。その時、地震が来た。電気が止まり、情報も入らないので、トランジスタラジオをつけた。すると、仙台新港に津波が来ていることが報じられ、ひょっとしてこれまで来るかと思っていたら本当に来た。

津波の様子をよく見る事ができた。津波は 3 回来た。第 1 波は国道 45 号線の向かいの「洋服の青山」の方向から。車が流されていくのが見えた。第 2 波も同じ方向から。第 3 波はジャスコの方向から来た。ウチの塀は、以前、車が 3、4 回つっこんで来たことがあったので、丈夫にしていた。それで車がぶつかっても倒されなかった（よその家は、車がつっこんで壊れたところが多い）。ゴミはいろいろ塀の中に入ってきた。自家用のバジェロは流されて行ってヨソの家におっちゃんこしていた。物置も、いろいろ物が詰まって 5、6 トンあったかと思うが、流されていった。看板やトラックの上に避難した人もいた。津波に服を流されて下着になっている女性もいた。津波がひいた後、あたりを犬のフンのような固まりが散乱していた。手にとると硬いものだったが、広げると文字などの印刷があり、チラシが津波の水圧で丸められたものだとわかった。それが大量に散らばっていたが、誰も紙くずだと思はなかった。水の力は凄いものと思った。

話者②は、デイサービスセンターから戻る事が出来ず、そのままそこに泊まり込み。老人ばかりで食料も十分になく、不安な夜を過ごした。その後、しばらく姉（話者①の）家に身を寄せた。妻はそのまま 1 か月入院。2 日後には仕事先から息子が戻り、娘と一緒に家を復旧させた。現在の家は平成 5 年築、それ以前の洪水で土台を

やられてダメになったことがあったので、その時に土台を高くした。建物もツーバイフォーの密閉型、壁も塗り替えて浸透性のない塗料を使ったので、壁から入らなかった。だが、床から水が入ってきた。入ってきた泥を3人で掻き出した。在宅被災者だったので、支援物資が来なかった。甥っ子がコンビニの配送センターにいたので、そこから食料を回してもらい、それを本家や親戚などにも配ってしのいだ。

15日には、町内の被害状況を確認して回った。地藏堂はみんな直した。近くの石碑は、車をどける際に市役所の人が直していった。

4月7日の大きな余震の際は、末の松山に逃げた。宝国寺の縁有会で毎年夏に草刈りをして、「何かあったらここ」と以前から言い合っていた。第1避難場所に指定されていた公園は、おもいきり津波をかぶっている。

宮内の人では、一家全滅に近い家が1つある。まだ仮設住宅にいる家も5軒いる。多くはここに戻って来る予定だが、よそへの移転を考えている家もある。

話者①は釣りも趣味の一つ。近所に釣り道具屋があり、そこに釣り仲間もいたのだが、被災して店をたたんでしまった。震災後は放射能の関係もあって、釣っても人にあげられない。津波の後は釣り人も減ったので、魚はいっぱいいる。月1、2回、放射能モニタリングがあり、釣りに行くといっぱい連れた。魚を試験場に提供すると20ベクレルかそこらだった。日当1万円が出た。スズキやクロダイは浜の近くを回遊するので放射能が高いらしい。釣り船も客がいらないが、その船を県が借りてガレキ除去補助などに使っている。



写真1 民主宮内契約会（昭和21年再創設）の帳面表紙